

昨日より來初めしごとき春の空總てを庭へと諸事決斷す

永き冬曇りし空を忘れむと春の日和を筆の友にと

久振りに子等への文を書き初めつ庭椅子上に思想集めて

一つ二つ終りしかなと喜ぶ間に空色黒く浸み出にけり

春雨の滴に濡れし娘への文我涙とや思ふべからむ

若鳥の春を歌ふのリトムの音谷川ごとき音の續ける

群鳥の聲の限りの合奏の樹々より春を讀へつつ拜す

やうやくに子等への手紙書きし今日書きにし事に顧み俛ぶ

知覺らずして書くともなしに書たりし知せずとても知り抜くことを

我書齋五月(18—5—1939)

マロニエの青葉に映えて我書齋壁の緑の色増しにけり

めきめきと石楠木の紅花咲き初めぬ隣の庭の石垣の側に

アカシヤの黄々と垂れたる雅さの雨後の晴れ間の向ふの庭に

大櫛の赤葉の繁げる木の許にアカシヤ花の黄々と流るる

石の塀の赤蔦の上の藤の花瀧の様にも風の動きに

やうやくに君好まれし宇津木花咲き初めにけり幼時の浮く

楽しげに語られたりし宇津木花花見る毎に御聲をも聴く

世の常の不如意のさまも映すなり出づれば雨に入れば晴にと

あの方等

彼の方等滞留しし中の御心の厚かりしよと偲び偲びて

何時出發や分らぬとの御言をば信じながらに落付ても居し

總て皆言にも御禮と思ひしが目先の事に日を暮し來て

とりあへず日曜日には名刺のみ家人昇せ我は車に

五月の其處此處

應揚に薔薇咲き出づる此日頃去年より懸けし人の心か

藤の花リラ、アカシヤ、ロドまでも雨を凌ぎつ笑みつ太陽を待つ

木枯の嵐の如き大霞咲き初む花に心もなげに

雨に濡れ霧に包まるリラの花世の重みを感じがほなる

傘さして朝の散歩と出にけり外は流るる小川の數々

さらさらと青葉を洗ふ春雨のマロニエ並木を琴弾く様に

春雨の晴るるがままに咲き初むる藤は如何にと友の園觀る

雨風を防ぎながらに若リラの白きが花の白きをぞ増す

亂るるリラ境を越えて自己がまま南の此方へ太陽をと追ふなり

雨晴れて何處も彼處も染め分けのリラの盛りの山の様なり

マロニエの大樹揃ひの並木街真中の疵を石楠木にて被ふを

並木街の眞直ならぬをレホボル帝(第二世)石楠木の森にて飾り惑はす

彩いろどれる小山こやまの様に石楠いすず木き花はなは廣間ひろま埋うめて頑丈ぐんぢやうのさま

松 林

友ともならず彼かの大使アンバサドールの夫人ふじんよと森もりにてさへも我等われら世話せわすは

去いる年はよく見上げたりあの方が書類書類御覽ごらんの木きの下蔭かげにと

一々いっさと帽ぼうを脱はりての禮れいに答禮こたへふ森もりの中なかさへ我我われわれ保たもつを

何處いづこにても正ただしくあれば其そのにて善よし氣遣きづかふ理ことの何處いづこにもなし

書かき留とどむる森もりの中なかなる仕事しごとなり筆ふでは往いくなり心こころのままに

とにかくに持ち居もる力ちから出いて來きなむもの騒さわしき故障こわなければ

御親切ごしんせつの方かたの御問ごもんひにつきて

着き後ごなる繁しげさのあらむ便びんはなし市街しやがい入り自働車じどうしゃの道路みちの多おほき如ごとし

彼是かれこれの約やくや何なによと満みつるらむ解とけぬ心こころの晴はるるをぞ欲ほし

物ものは皆學者みながくしや的てきなる解剖かいぶに世知よちり確たむるに力添ちからぞへなむ

何處にも眞理探して一通り考へて後歩み初めなむ

家の書類始末せむとて暇なき身體にも暇を第一に日々

祖父上の御調べありし書類にも筆とり初めて我と喜ぶ

初 夏

我宿の群がる鳥の朗らかなの其聲々に醒むるの我

空を屋根と庭に居居る初夏の恵み満つるなり我身の上

嗜しさうの揃ふ膳部も顧みず菊に水よと勞はる人等

吹く風のまにまに流る若縁居並ぶ樹々も高浪の如

心速く時も速かずに緩々と事なし遂ぐる小鳥の聲聞き

我庭へ人も猫もと遠慮なく夏の恵みを拜し唸ふる

雨の日は心もとなく眺むれど亦他の要事の運び行くのを

幾週の春の恵みの雨なれや今年の石楠木の雄々しさの現ゆ

花訪へば語るが如し自然なる恵みの露の限りのなさを

雑用に時を惜しむの人等にて花への心往くが貴し

日毎々菊を養ひ花を待つ心ありなば何か仕得なむ

北歐の氣候と菊

年の中心盡してやうやうと花を見得るは暮秋の頃

御繰返しの御親切の御心に甘じて一筆

御言

あまりにも人等の高く話す方其を書きたしと我の希望ふと

ある高位き御親切の御夫人が度重ねつつ我書きたしとは

我としては兩脚二足といふごとく書きて戴く價值なき知る

申上げしは

御熱心の御心聞き上げ恐縮し安達の事なら書かるる所も

何うしても我書かなむとの御心の辱さよと恐入りたり

左あらばといと簡單の我なりと我筆にても書かれ得むかと

此意にて我は決心書きし行何一つとて珍敷はなし

我につき感謝の深く忽體なく思ひ續くは家庭の恩

圖らずも御恩々々へ筆し得と此御夫人に謝するのみなり

昭和十四年 1939 七月四日極東より安着は同九月廿五日

我心に沁みて答ふと若夫人方張子の犬連るる人形の御使者を

人の沁む心は全く祖父様や兩親方の被下しものと

山形市師範學校附屬小學校時代後のある海軍大將の父君方先生昇校の私へ

顔青し學び過ぐかの御感じに我を見らるる御不満風に

學ぶ程喜び増すの我なりし喜ばるるの母の御顔に

卒業の折

恐れ入る御言々の溢れたる御歌も戴く祖父様よりも

昭和六年 1930 三月の春

最近の歸朝の折に御短冊の美事のままの御姿にぞ觸る

金色の御墨のさまの鮮く祖父様崇拜む心地せし我

留守宅に残し難きの思ひして大事に我は海牙に共に

昭和八年 1933 初春夜

我が祖父の我への御心知らせ度く子等にと客室に持ち來し我

見せなむと思ふ間際に愧しき心出でたり引出に入る

翌朝掃除後

大切に保存せむとて客室に行く早や品失せつ以後見當らず

金製と見えしものにやあたら我が寶物は往く我を離れて

我のみに包み得がたく敢て筆く我が眞誠心の堪へ難くして

偲び出づ巴里の千九百年に

小學卒業折頂戴品の金巻繪の硯の箱の削られしなど

學びつつ喜び増すの我なりし母は憂ひし此まま進行かばと

尙ほ高き教育の道は此市には未だ開けざる時代なりけり

御歸宅後の御教授被下たる先生方

謹記しぬ御名のみにてもと諸先生貴重き御時間賜與りし御方々

佐野誠一郎(關原彌里)宮島昇(松岡太愿)内藤季次郎

山形尋常師範山形中學校の先生方

漢學に和學數學等々と御教しへ深く垂れさせられしを

例

國學の教しへの君のくだされし折に觸れての御歌の幾つを

道不遠人

龍の行く雲路は如何みやこへはしつの家居のかとへよりこそ(太愿)

常磐木

霜とちてうらかれゆけはときは木のもとのみさをのたたならぬ見ゆ(太愿)

松柏後凋

春秋を時知りかほになまめりてみふゆもいろをかへぬまつかえ(太愿)

雛鶴

千代よそふ聲の雲居をわたるまでたかくなれなんさはのひなつる(太愿)

生家高澤の字を用ひくださる

送別

露たにもまた溜り得ぬなよ竹の木枯しかけに霜や重ねん(太愿)

龜鶴契久

千代経てふためしなりける鶴龜もきみにならひて契りかさねん(太愿)

祖父上はモラルの外に歴史上の人間の講義を毎夕食後に
道徳

二宮翁御弟子の祖父はものに觸れ經濟上の根本をも

祖父様の御物語りに楽しくも馬琴作等々幼學時代に

私の生れし時より常に御教養被下たる御祖父様故左の如き御詞をも
賜りたり偲ひ拜し上げて

孫女鏡子の卒業を賀して(小學校の)

大君の恵みに磨くあら璞の闇をも照らす光とそなれ(三省)

孫女鏡子の遊學の折(東京へ)

大空に羽をのはす鳥や秋日和

小學時代親友豐子様と

お互にパンシヨナになり日曜日読み合ひ盡す物語の冊
兩家にて選擇

此方は御恩を受けし先生の房子の君の令妹なりし
碓井

維新後の子なりと祖父も母上も人間の土臺へ練磨を我へ

人間として歩み得る様ひたすらに考へられつつ我への教養

祖父様も母様までも轉ころびても起き上がらるる素質を我にと

維新にて經驗積まるる方々の愛するものの行末思はれ

父上はかけ離れ居る親戚に要まうは書かずに我が口上にてと

御使と車に包み載せられて伯父母方おやふぼがたの御家々々に

其そが毎ごとに愛宕あたごの山に昇りては建勳賞勳神社の禮拜

織田信長公吉田大八殿を祭る

祖先へと御慕拜おみせり代表と花も捧げて歸りたりけり

權威家が此縣よりの代表者と高師へ希望抱くと父に

此縣よりは未出の事なり縣としては其人あれと熱望なりと

婦人としては

現時としては此校こそはより高き教育場と確信すとも

瞬しありて同じ方々が

いざくと高師の補缺に出られてはと眞誠盡しの御言々をば

私は私の程度を知る

小學を終へたるのみの我^{わが}としては望むべきにもあらぬ事よと

山の上の花を仰ぎて昇り得ぬ稚兒^{わが}の如きのさまにもあるかと

何れへか

順々に學びの道の高きへと我意の助成を祖父も母上も

無理のなく學びの奥に進めむと父も思へり其様視せず

先生方

高師なれば其上に出づる程度もなく宿舍もありて安神なりと

親戚の漢學者方孝經を全部説けよと即座に我へ

満點と父へ上京許可をば乞はれたりけりいと眞面目に

先生方御繁^{がた}き中にも我が爲めに夜の講義を御自邸にまで

夜の通學にはと

獨りにて來邸すべしトンビをば被り行けとの御命のままに

私は母の御言にトンビ着て夜の講學に往復せしなり

上京は危険なればと政治家の親戚者より東京よりは

十に九迄皆大抵と敗をとる鏡殿上京深憂あれよと

子を知らるる父親の心は決せらるされど我へと責任負はさる

同行は母と確められ諸準備は總て母へと責任を父

溫厚の父は靜かに三案を母に與へて平然たりし

服裝は質素の質素と母の意に安全的に母も我身も

板谷より福島に出で宇都宮初めて汽車のありし時代なり

旅 行 中

何の旅館も我等を引けり上座敷に商買柄や眼の利くよと母

中々と難義の旅にてありしなり我安かりし沈毅の母見て

母上御一見後

或方より確めたる宿の不完よと我作はる御知己の家に

入學の一課作文 題自由

撰題は姥捨山にてありしなり我は書きたり心底擧げて

中々と意味の分らぬ問題に我質問を厚き先生は

不圖も入學し得し十名と百にて數ふ中なりしに

證人 は

父が友の宮城博士と恩師なる房子の君の父上の方

此博士畏友と常に我父を君に説きしと君より我聽く

ある藩々へ

維新前危急の時に父は本使副は博士と我祖父に聽く

溫和とのみ人は云へどもと博士の君

我父を畏るるなりと博士には要ある折の剛毅さ偲ぶと

よくくと小供然たる我の沁む同志方の厚き愛顧を

翌年は豊子の君も入學し遊歩の時の樂しかりしを

上級並に同志の方々

日曜の外出前の御多忙中髪などまでの御世話を我に

何時とても其方々の御優しさの姉様方の心地し残るを

昭和十二年 1937 春櫻蔭會の會報を見て夢言 小田しの姉の逝かれしを

懐かしき御會の貴紙の上ありくと宮澤小川二姉の御筆より

今朝着きし御筆の流れにし君のありし委しさ知りて感傷

沁々と心の底に皆様の美し振りの浸り沁み視ゆ

天女かと慕ひたりにし學び家にありし其當時偲び續くる

智徳より萌えて熟りし總てをば讀へ崇めつ外國武府に

美しき御心流れ美しく美し花を内外御園へ

逝かれしは悲しみの極みなれど

御美しく御在しますらむ美し世に美し振りに圍まれて君

宮澤様に小川様に

小鳥のごと巢離れ飛び來し我なりし相見も爲得ず隔て續くを

床しさを胸に繪きて幾十年聲も聞ゆる處隔てど

やうやくと力も出で來近き内細かに事を拙き筆に
御序に皆様方に鏡よりと御身體御大切に申出でしを

心厚くいはれたる君の詞

偲び上げ忘るべからずと我への深き御恩の我が兩親上へと

同

沁々とよく愛されて育まれ好むがままの學びへの道へ

實にも我我幼時の浮ぶ時喜ぶ我は其當時の我

父上の御配慮

第一(年)の暑中休は母様が御自身上京楽しく家へ

歸り路は校友方の秋田より水害中も無事に歸校を

第二(年)にも母様御出京ありたりし此歸り路は御知己の夫妻と

第三(年)は獨り歸れと父上の御命のままに我緊張す

仙臺より作並通れの御命にて山中故に我が緊張の度

祖父様の母様方の御喜びの御顔は今も見ゆる様なり

我とては獨りの旅と山中もといと得意然の心現はる

後年に知る

父上が或驛々に旅館にと御自筆にての御依頼ありしを

歸り路は緊張せず御夫人等の上京あるのに歸校し得しなり

第四(年)なる終學年には父上が御自身我を御迎へくださる

一般の教養かなと父上は江の島行や觀劇等々

衣服などの細微の注意も諸支度も御世話のありし父上なりし

卒業の折　いと高き貴き御方の御言なりとて或位置の方を経て同窓の方々と共に謹承拜上したる御言の御意は

如何にやと心々の喜びさかかると校卒ゆる子等持つ父母々々

大正の御世四年(1915)墨國より歸朝滯京中難有くも
皇后陛下　東京女子高等師範學校への行啓への御件を私も拜し奉りて

難有く供奉に加はり畏みて行啓拜す昔偲びし

彌増さる學びの道の光輝きも　御代の御光溢れ映りて

久潤くに母校の現在見昔の來諸感湧き立つ我身緊張にし

高師なる校長閣下の御書をも我頂戴けり間もなく直ぐに

校長は在學時代のシアンスの名高き良師の中川先生(謙二郎)

御恩ある先生方にも沁々と御禮言も爲得で我外國に活動く

頂戴いただきし知識ちしき事々ことごと我われ助たすく東と西と遠く隔てど

君が職掌しよく關係上よりの諸知識も難有ししと感謝し沁みぬ

畏おそき貴たかき御高恩

皇太子妃の宮殿下の御時より奉仕の我われの難有かりしを

美しの御心盡しの方々の御心情ありての我身の奉仕も

いと難有くも

明治の御世三十九年六月より大正の六年十一月迄

1906

1917

言ひ換へれば

内外うちとに在りつつ奉仕仕り歐大戦中に白耳はくじ義國ぎこくに來るまで

何處どこにても私は謹みて

何ととも皆國民みなへ難有むづかし御教垂示みせしめふを仰ぎ上げ頻く

當府大家の西班牙シルバ家出の夫人の許より歸宅

去る昭和四年 1929 六月聯盟理事會の折の西班牙

マドリット府を偲びし (6-1-1939)

上流社界の當府なる全部集めし様なりし舊知の満ちて思はず長座も

かねくくと聞き居しごとく西國國民士風に滿つる住民なりとも

ホテル部屋扱ふ婦人の行儀のよさ其國振りのある貴さの

家人が果物の店の最良の林檎探しに苦心したりしに

品や多しも林檎はあれどあなたには心安らに御上げかぬると

此の午後にと御再來あれ最良の珍物を差上ぐべしと

御互に言語通はぬ間柄隣人頼み佛語にと主婦

マドリット理事會長の安達への自動車運轉士の政府の撰擇も

聰明にロアイヤルにて何事も明らかに清く處置し繼ぐのを

人民も武夫なりとの心組据り居るやの表徴や多けき

エスキュリアル高僧方が地球儀の世界にての最初の古きものをば
西國皇室の御墓のある宮殿

徳川の最初の時代に邦名士來馬の書名の馬府の宮殿に

博物館には昔しの領地の大畫師の作も集めて世界にも名高し

古き國古き名譽の溢れたる其國なれば人の心も

ウォルベール

今日とても不定の天氣なり夏の日なれば利用すべしと

必需品一切積みてウォルベールに松山宛に我等出でにし

居並べる家やウイラなど咲き飾る其色々にメキシコ市想ふ

太平の廿年の間總て皆美し振りの外見の溢るる

ウォルベールの三池續きの岸々の柳や多し古色帯び來し

レオポル二世將來を圖りて造られし山谷池と續く公園

善き事の解らざるかと其當時の悪聲などを知る人等聞く

偉なる業見えぬものかな其當時の二世の爲れし偉業の數をと

年経りて池も樹立も山も皆自然の様に古錆びにけり

春知らず彼岸櫻も其處此處に海棠などと緑の中に

睡蓮の大洲や小洲の浮模様池に満つなり竿持つ人満つ

ウォルベールの水際山邊も人満てり草の上開く家庭の團樂

夏の期や緑の山の谷々の草花時めく芝の美し

廣やかなの高き岡には鞠投げのコートもありて若人の群る

空に向ひ弓引く固有のフラマン的の技術の場處は低き水際に

氷菓子賣りは二人のみにて白上衣に小箱擔うて廻り訪ふなり

夏の期も種々の事情に首府に據り海へも山にも往けぬ人の來

美しき小山の谷の草波を海水如く泳ぐ見ゆなり

雲晴れて酷暑となれり美しや熱帯風の風も吹き來る

縁みどり込む松の林の深森も尙ほ淺しとの瞬間の感かん

酷暑とて三日と續かぬ所なりいと貴しや我等にとりても

休みなる兒等を母親連れ纏まとめ楽しく開くピクニックのさま

大抵は牛乳ちゅうにゅうにコーヒコーヒーの入はいりたる飲料配はいけつつ飲みて楽しむ

暇得し父親達ちちは子負こひ來て天の恵みの太陽當る草の上

親達も子供になりて兒等と共いっしょかくれんぼを楽しむや美し

テニス者にも佛やフラマン兩語あり行儀や正し天心の滿つ

孫の手に手取らるるの老婦人場處柄故かいと若々し

獨りなる年の老いたる智的人空を眺めて林崇かむも

午後なれば遠き御茶屋の音楽の風の都合に響き來るのも

中々の廣き場處なる山々の陣取る兒等や咲く花のごと

栗鼠りす々々の枝を渡りて松の實の出來かかるのを食たべる忙いそしき

午前中は自動車も奥に入り得れど午後は歩行者自轉車者のみ

夏の首府

走り繼ぐ自動車の数は減りたれど寄せ來る自動車ウォルベールに滿つ

大抵は自動車持ち居り車庫なきの家の借り手のなきの有様

夫人方もオート運轉買物の市場行のも商店行のも

プーブルも職業上の自動車にて家族と共に食卓持來も

山や谷原や林と續けども三度新たむ巡視に安神

私等は晝は歸宅りて通信など落付處分し十四時に山へと

午前中はモトシクリストの軍隊の練習用に山の迂曲路を

私は奥の山上の一隅の松の林に假りに住むなり

夕方の我等の歸り出づる頃務め終りか父親も夕食籠

寝る迄空を屋根とする家庭組引きもきらずに我家の前通る

私の日を日に繼ぎて筆とりしウオルバーなれば一筆しぬ

遠き子等へ重ねて

任國外奉仕の折は父上は

何時とても議場籠りの戦闘なり智勇較べに日は續き過ぐ

太陽のありて美しき日には殊更に君を痛みし我身に較べて

寫し繪に心紛らし不自由人旅行の夢を現實することなど

我とても東の國の繪景色の或瞬間の所在地忘るも

繪も描けず筆もあらざる我なれど心に沁むる自然の寫眞と

拙さを忘れて我は遠き子等へ細かき要らぬ事の端をも

繁々の要なき様の處へも子故筆の敢て往くのも

世を経るに近路も遠路も横路もと撰めよ剛毅く正道の路

父上が撓まず踏まれし正道を御子等に説かれよ有益もあれよと

近頃の歐州事は一々と新紙に日々に御承知と思ふ

此程より

やうやくに鹽も賣り出づ冬過ごす石炭の用意も幾らか此家も

運動も出来る範圍に怠らず近くへ庭へと勢を出して

日毎ごと中々要の溜り來て思はず遅くるる入念の返も

晝の間も何れよりかの飛機通過ぐも巡邏の飛機絶えず響くも

時節柄此草稿につきて

讀み返へす暇とてなし船便とて失せなんとする現時にしあれば

拙さを彌増すことと惱めども船出間に合ふ要や重しと

英佛獨戰爭中

安 達 鏡 子

昭和十四年1939十一月七日發送 346. Avenue Louise, Bruxelles, Belgique,

附
録

「過ぎし一と影遠き子等へ」は

時節柄物拂底の折なれば印刷前にもありやせぬやと

間にあはば左の行々を加ふるも子等への我れの義務つとめかとも

筆なきの我にしあれば讀みにくき事にやあらめ推察願ふ

當府への時變 五月十日 (昭和十五年)
(西曆千九百四十年)

明けぬ間に數々所事ありし空騒がしきに醒めし我五時
(五時少前とか)(最寄)

家人の乞ひに従ひ其日より地下室住みと我は落ちつく

大響き一まづ止めば地上室の要事に我は熱中せり

要すべき事は落ちなく爲さむとて心靜かに外事を確む

空の音隣れる市の物音や物皆と沁む我等の上にも

廿六年前夏自由市等々諸仕末事を聴き知り居れば

早速と昔しの此市の賢しさを繼ぐや如何にと識者等に電話を

確實にと安全なりとの答聞く別れ居ながら我人守護る

三日目より飛行場のみの戦ひなれ警音凄し心張り緊む

無據 家人劇しき空音中

此間にと拂ひ始末の額々をバンクに行きて人積む中に

小切手は用に立たずと現金とあせるの時の人の心の

戦時状態上半ヶ月に五千フランのみの支出の新法則實行時

三日前支出致せり法則の上出しかぬると人のいふのを

家人大位置の人に面會を乞ひ時變なり

法則とてや人の造りしものぞかし法則の上なる大法やあるべき

安達氏の夫人の事なり承知せり其額々を持ち行かれよと

大事とや領き處置す教養さ機に應じ得る頭なりけり

外國への事や全く中止る國內さへも文化機關の刻々消滅ゆるを

ある間際御親切に

或方より國出づべしとの勸告も厚意を謝しつつ禮を重ねぬ

此際直ぐに

佛國への事にしあれど我待ちつつ世話しくるるの人とてもなし

辱なき御助言を厚く謹謝しつつも

義務ある身捨てつつ身を思ひ人忘るるの事や爲得ずと

外界と没交渉の折なれや時貴めと書類整理を

昔しより書類整理を希望めども時なく過ぐるの身なりし我

書類より

難有くも安達父上祖父方の爲されし事を我は仰げり

此御家も

御大祖は京都なりとは聞き居しが系圖の寫し御父上の御筆

或校にて或我子女等の問ひとて語れる昔偲びて

昔なる幼な心の幼な問ひ偲び出でつつ一と筆茲に

御家は清和の源氏六孫王經基後の繼々なり

一系

家氏(最上祖先)宗家(尾張守)宗氏(宮内少輔)家兼(稱又三郎)と

兼頼(尾張より最上山形へ入部)義光(最上)出羽(守)山形殿へ

一 系

家氏(既記)宗家(既記)高經(尾張守)義將(文部大夫)と

義重(左兵衛佐)義淳(左兵衛佐)義信(左兵衛佐)信重(左兵衛佐)
號安達三郎 號安達五郎 號安達次郎
管領 紀元貳千〇六十五年、後小松天皇慶永十二年乙酉
西曆 1405

信重(既記)より高重(左兵衛佐)義高(尾張より羽州)信定(式部少輔)と

信清(刑部)信久(氏部大夫)久右衛門(出羽國山形住)
山ノ邊安達家の系となる

義高は尾張より羽州寒河江(がさ)に下向君田に住

後花園天皇の御世寶徳二年庚午(將軍足利義政の時)
紀元二千百十年 西曆 1450 以後羽州永住

信久の山形住は慶長の十四年(己酉)八月三日の事 紀元二千二百六十九年
西曆 1609

久右衛門次弟信勝は徳川よりの山野邊(義忠)公に初めて奉屬
家老職備前に隨行

三郎左衛門(久右衛門)第三弟 兄信勝と備前より水戸まで共に奉仕續けし

信勝と三郎左衛門共々に助川安達の系となる

久右衛門子孫 久左衛門(幼名左久内)等々

剛毅なる人や多し正義もて公益計るの業蹟や多し

安達峯一郎祖父上

第二代久左衛門源義徳幼名民次郎名は穆字は止信鶴滂と號す

文化九年壬申西高栢に生る人と爲り温厚能く人言を容る

1812

幼にして深堀村佐藤忠右衛門源忠貞の門に遊び和漢の學を脩む長じて農を業とし西高村の保正たり傍ら子弟を教養す鶴滂歌集遺訓あり

慶應元年乙丑極月五日歿す(法名願言)

1863

安立(安達久)安達峯一郎父上は(右願言の嫡子)

第三代久源源義方幼名作次郎(名ハ篤(字ハ)子行鶴陰と號す

嘉永戊申(元年(1858)十一月廿八日)秋誕生まる性温直に權貴を避けず

幼時は父に學びし稍々長けては鳳鳴館に東子明の門に

和漢とも脩めし後に谷澤村の加藤嘉平に數學測量等々

小學の事務扱ひも教養も町村會の議員は數次に

父上は水利土功會規則編制委員となり規則編制せられたりけり

玉虫(數百年前よりも争論
歴史のありし處、
或一祖先の管理せし處)と二つの溜井水利(土功)會議員たりしは數々の度

衛生の農會のとの數々の創立委員を此父上は

有名の關山新道開鑿には村山四郡聯合(議)員たり

町長に父上は居まして傍らに子弟教授を晝夜となく

父上の唱導

八ヶ村北山其他の入會秣場境界不明はと實地測量を

此御仕事に

星の下山に登るも月光に家に歸へるの歳餘なりしを

公衆への仕事の果てや美しし美事に事を治められたり

報酬は全然辭して受けざりし唯公衆への赤心なりとて

論よりと

志戸田樵澤反田なる三ヶ村をも測量製圖す

其 他

當り見て正しくあれと其當時かみの土地問題に測量唱導

神苑會委員の補にと同會長支部長よりの囑託を受く

(從三位勳一等
男爵花房義質)

(押川則吉)

支部長より盡力感謝の賞状を受く
(關義臣)

二回まで東村山郡(郡)より賞状を金圓賞與も同郡より

三回も賞杯賜はる縣知事より金圓賞與の一回も

軍の費と貧民救助の献納に謝状は受けし二回まで

東村山郡ぐん長より軍費の寄附にと謝状一回

古しへも今も變らぬ必要の貯蓄の道はと父上唱導

組合は父上言ことに従ひて浪費省きて四年間驛遞よとせよ局に

其當時の父上の言

強兵も教への道も保健上も皆容易からめ六十年繼續なば

父上の御一詩を

潜心燈下坐靜讀一牀書 獨與聖賢對何關社友疎

人の書に詞に

御住家をば對賢堂と父上を對賢堂の主人と仰ぐを

永久へと

明治卅四年(舊十一月五日)門人方碑石を建立して父上の功德を
(1901)

其 折

二方等の略履歴書かれて御次男が御弟子の方等に配布け謝せられしも
(祖父 嚴父方) (孝子 幸治郎氏)

此程武府エキセル湖邊友なる或貴夫人に出會

熟知る友に遇ひて驚く幾年を經過しが如しも我も等しも
深む夜の空晴れやかに星の満つ

星宿る空や今年的美景かと

何方も殊更盛る諸花の比類なげやの珍しの年

昭和十五年七月十八日諸公館の方々の離武の日記す
(西暦千九百四十年)

武府にて

安

達

鏡

子

往きし日の楽しき歸朝の其當時の寫眞見出せり占領の武府



昭和十六年一月十五日

昭和十六年六月十五日印刷
昭和十六年六月二十日發行

(非賣品)

著作兼
發行者

東京市澁谷區常盤松町六十番地
安達鏡子

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
山田三郎太

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

415
415

終